佐々木三郎盛綱　六百十年
狩場興市翁的　同年
悪七兵衛景清　六百十年
能登守教経　六百九年
頼朝節木隠　同年
同大佛供養　六百九年
曽我五郎時宗　五百八十年
梶原景時逆櫓　六百九年
源義経弓流　同年
梶原源太雪の upper　六百九年
真田與市義員　六百十四年
頼朝七騎落　同年
景清牢破　同年

作(さく)本二帝盛(りっせい)細
大将軍(たいしょうぐん)三位(さんみ)の中将(ちゅうじょう)重衡(しげひら)
と云(いう)て後(のち)の教(きょう)訓(くん)なれ
をとりあつめて記(しる)して源氏(げんじ)の方(かた)
に私(わたくし)一部(いちぶ)もなくかくごとく
日記(にっき)あらわす。実(まこと)に作(つく)り来(き)
盛(せい)繰(そう)。其(その)日(ひ)のまき終(おわり)や。
月(つき)ぞ重(かさね)て澄(すみ)つらん。で
ござります。

一人(ひとり)源氏(げんじ)の生(いき)びつの矢
に乗(のり)移(うつり)非(ひ)業(ごう)の最期(さいご)遂(とげ)
来(きた)る馬(うま)の前(まえ)ふさまで武
士(さむらい)の教(おしえ)入(いり)とのどもさ
たる繁(しげ)盛(せい)記(き)。

一人(ひとり)の負(おい)
ぺい物(もの)の望(のぞみ)ある名(な)と分
のある程(ほど)い宇治川(うじがわ)の先陣(せんじん)
をおくを乗(のり)も後(おく)の先(さき)

渾(こん)なきと肝(かん)臓(ぞう)碎
き念(ねん)じ立(たち)つらんとある浜
浦(うら)の男(おとこ)に宿(やど)ぬことぞ称(しょう)
名(めい)ありんと出(いで)給(たま)ひつ
ーぱ海(うみ)をるまで海(うみ)を
べき所(ところ)いづくぞと勇(ゆう)
しふうの男(おとこ)ーまへ浅(あさ)
瀬(せ)の月(つき)かいあの東(ひがし)に
月(つき)の末(すえ)西(にし)ありとー
作(つく)ーば涙(なみだ)して供(とも)んとぴか
男(おとこ)と二人(ふたり)ーを海(うみ)
ーに命(いのち)のさうあれものて
ゆくその男(おとこ)紙(かみ)ー枚(まい)
ふまづめ頭(かしら)日(ひ)後(ご)の
先(せん)陣(じん)をーて名(な)を後代(こうだい)に
残(のこ)しけると

梶原義経逆櫓

梶原義経と立てぢの弓張月
逆櫓論あつて矛楯へ
をし八幡宮んと云のひゞき渡邊福島あつて矛楯へ
と云んとの義経逆櫓と
いひぞこの時へ梶原景時
まことが大事ふて此へも
逆櫓立ちぐとうらを
入て行方へもまた安き楯よ
いざさんとも義経逆櫓。
生ん生ん金のわらじよ生ん生ん
もひとつとあとおひ

わらけまびひらつものやひ。
ゆてさあうに経おくこと
の私の逆櫓が立ちより
はやひらの楯ふてひらんを
わりけまび梶原のことて
やうぞきこ大将軍とゝいひ
ぞ梶原ひけびきを
引分を合うて敵をと
とさうてひきあり
るのあく武者とゝてあぬ
事ありとうせび義経
つ紙おこーのひきかにと
うひのよ。くわそあとめ
梶原も将あ後ろぬ遺跡
にようぞふ逸倉にて
へ候云せーとや

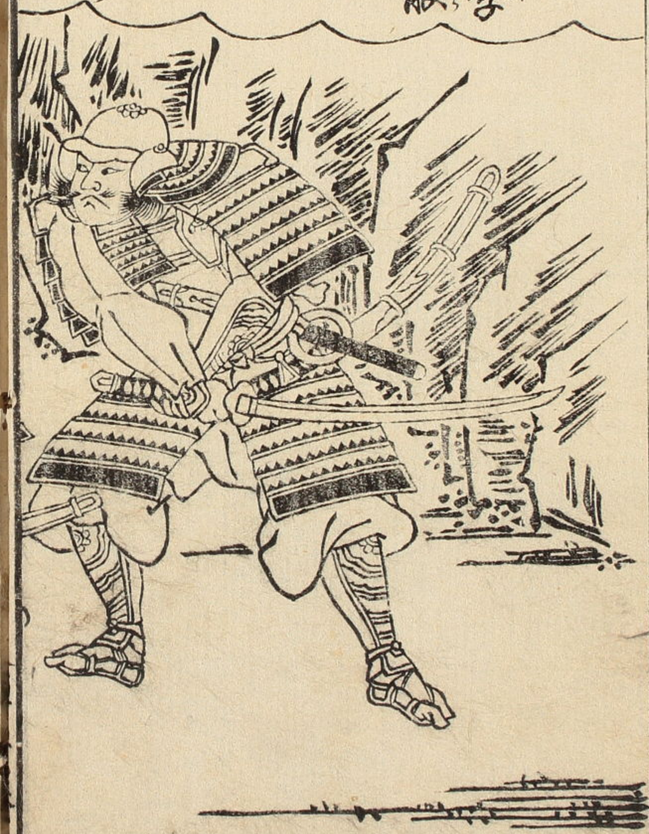
那須與市扇的

平家の凍よるを少私一艘
湖の方へ漕よせよのおろ
十八九ある美麗が女房の
着つる衣に紅のうち海を着
たるが扇を弘矢源氏を
招くこと義経公をびき
出し討とらんとの深き
愛て下知の図乃
佰人那須与市宗
きと云者義経の
仰付をうけ海へうち
入弓に矢はげ引ま
ゝ

称らひてうひき
ひうとと放つ矢に
あやまたず扇の要を射
きる。ひゞ扇ふかに空ふ飛
かぶらや海よ入にけり源平の
お陣是をうんで射うやく
とどよめく。ゝ扇ふ立てを
けり。彼女
時あらねばやおもふらん
かの舟舟初瀬の禁をや
私ご。変に平家の私う。
伊賀平内左衛門の真ご入
扇ご海のこゝろとなを弘
弓のよういなりこそきく
と。三三返吟じて帰ろう

義經弓流
公家の軍源氏の
方治め勝ちよ
ありと見へ渡りの
八十余騎渡れ
けるそく残し置
時義経うそを
ついの打吉
彼小沙も敵
私ちそく流とる
とあざむきよんを
去のひぬ敵の私

よるとおもふまくらもうつくゝ義経の甲冑打かろうさま一どもはなさで
うちそなえ上げ給ふ立うへ
ゆく時方おどろき給ひ命にくわ
ほうほうとにげまどひ給ふ弁慶八幡大菩薩をのやうにおがみ
ふひろうとうくまんいち悪き命にくんとせ
ありとのこゑひゞ



掘兼源左衛季

生田の森の合戦ふ衛季
梅のむれ咲ころ秋一枝籠
にてさけまへ至時歌よ近
きもと歌へ緒丸ようも
先祖と称して戦を父
義朝のごとく柱に糸附
いそもおわりとやけへ歌ふうう
ふせろうこうをこゝなのりけ

三男平治重
こまるとに先祖のけんこと平
并せのして浅沙の勢の終り
ざるんふぜんげせーりのげん
ちうろぼきうーと大将軍
ようの作ふぐ名乗ぐわそ
武士乃こと
つよくまる
あづさう
ひそやかの
のこりのこ
ごんーてぽー歌
陣へうけへ十文字ふ
ゆきうろてぽうとう
けうとゝん

悪七兵衛景清
能登守教経四方を
払ひ給ひ
義経の
いふもさて義経ハ
討とらんとあまた
来り
鬼神ともある
景清おそれず
一ノ谷の方へ
引退く
みかのや正春

能登守教経

教経入道殿中納言教盛
の二男平家一門の中にても
武勇勝れ人にすぐれ強弓
のほど並大かたの精兵
あり平家数度の合戦
小平氏の靡く討負しが
水潟の合戦ふ教経の働
にて命運の勝敗を
ぜ一二ぜまの合戦中折
破れ大将殿より能登殿
山のそ向ひ

なんとて城中静まれ

一方余騎とそんひよる
城のふりく向ひのくり。
おろふ義経ひよるぞ

一の谷逆落し鬼神の
ごとくとんでくる平家の
仮屋汗馬の轡とり一大事
も演のよも武勇和漢の
大軍攻戦の数度教経の
軍ぜんぶ一
ぬんぬんの
思ひ出ぐさ
なれ共
和ふのり
小笠原の流
ゆえ

義経も船夜ぬるを。
さて佐幸射の中
に出さんとをしに佐藤
嗣信楯板射ぬるを
ると引ぬくと。
教経の声高
く名乗九郎ぞ成
そこんと走り
出るを矛を伏
ず敵つ矢ぶ膝
に成射ら也死
をも後ぬ教経
い義経成対ん
とかけ。船中
を飛めぐり給ふ

義経の船中
うろめいぐるい
ごとやあがくん。
味方の船を平
のきこしとゆう
教経とめいぞ絶
ず業おけんつぞ
教ぶふのごと力
甲も海へ投捨て大
ぶ成ひろげぞ絶
に組て中落とも
のへ取へおきの左右
足手もづと組てたち
の服れ引被へ海へ飛
入なひろう

真田與市

頼朝伊豆の國姫ごが淵にて一寸
ほどの黄金の觀音を得給ふ治承四年八月十七日伊豆の目代和泉判官
兼隆を夜討ふ一まず土肥小楽を發足を初めて三百餘石程ふ
筏つくりが大庭服部が攻らるを見給ふ武者お模の
用ふ大庭服部が仮面を武士とうんとうなり味方の門ふ渡答して
やうう弓矢の多の数そ人ふまんまん者やある義實、
とアせばふ市とらまた大庭服部と組でる名せてあまびふ市曳てひと
一騎。敵陣へ打入ひ比鬼神と雪へしまま真田ふ市
ふ大庭服部ハ初ふ比真田ふ市曳ふ名
ふ代へそうきうる實に服部ふ市ふ市
服部代ふろこひろまき貴代ふんと
ふとうこんまび要取りげて
と割んと申にわてたきたれ指

かけ来り給ふ主用ゆ
対ろうけると与市が運の
悪しきか深次弟と対
し時力とぬぐらざるや
にうなきが血あそ
まりて接ざろけを
与市うまーうまー
けきが深ふかく
かとやうを

頼朝公弟木曽
石橋山の合戦にうち
負給ふて。梶原
大音声
追懸る。
敵と組
し給ふ中
にも梶原をねらひ
只一打に討んとせしが。
いづくともなく助けうり。
去る程に大音を揚。
弟木曽殿と云ふは梶原
氣色を損じ。弟木曽
名乗よとぞ呼ける

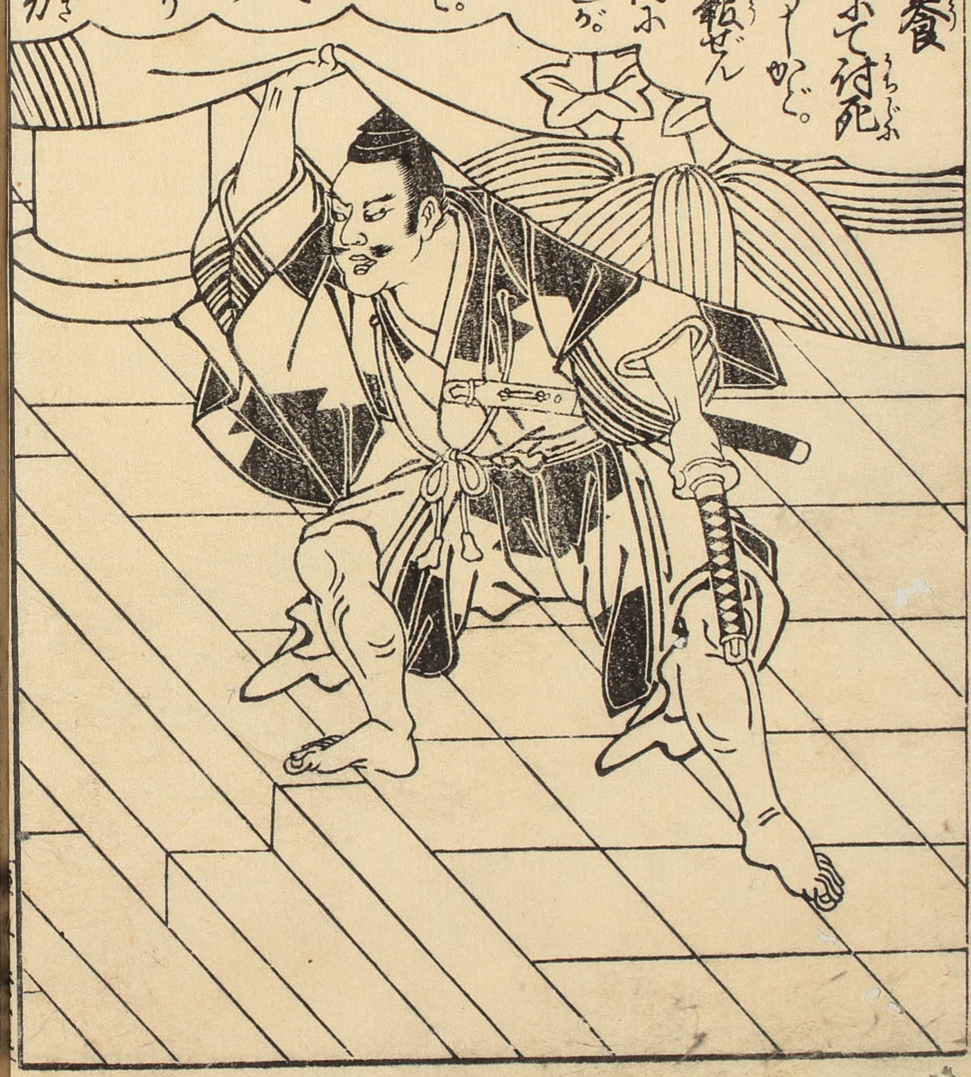
爰にいづくとも弟木の上
にわらうが立踊けるを旭
一矢に死せう。大音声を
て驚ひたりとぞ
是偏に八幡宮の
加護なるべし

頼朝
七騎落

軈而衣笠の城を被
らるゝ。主従八騎小て安房
上総の方へ落行ける
きの〻時小軍勢のこゝ
やつぞ迫る義経勿
きー時も八騎。義経心
落ー時も八騎源氏勿
而て不吉の例あり八人の
内を人此不小吉つあり軈
共小七騎小て落あい。
破家星の降さる浪

運をみちくべーと
為なれば名月と貝を
見わけ兼る而ろ
去肥実平婦よを
乗にいつやういづく
みく君のみ小死を
るもいし幸なる
山伏私小頼こゝろあれ
び海私よりよりやう
歌と組て名代勝せを
いへやぞ私ようよう
主従一手小引んぎる猛
の神代もかりけるぞ
哀とそ

大佛供養
京清水西門にて討死
をげき勇あり。
互恩の恨と報ぜん
と尾張勢四ふ
の忍び居り。
南都大佛殿
供養あるべしと。
猶倉皇帰
國のうへぞ
天の時至
と東大寺へ参り
庶佐小さ刀
とり後ろ方



と衣の下ふ
深一重り
を。鉄父宇恵
幕の内よる
忍び行。多き兵
と後の中に控へき
法師あり宝を辛奈
の佐京清あらんずて
ふと。下和の下を。
軍兵大勢と雨降
薙刀あつと宮前
にきり立退くひ行来
ちらど矢ぬり

亲清
宰破
亲清の秩父の
武士を捕まえ。
六名を一ふ
悟宰とろ
らの禁獄せ
らるる勅書

観音経紙幾捕
せつがわの時ふ
現世名本光
あるーふ者
者ふのそばを
ふー時ふ五体
とろうと
動るな
大行
ふうり
一文ふきる
るそまより
宰をおー破
者ふとろく
投ふみりせ
投ふみりる

曽我五郎時宗
大磯の宿長の伴ふ三浦
一家と曽我十郎と恋の
情あるう〳〵仮寝ぐ。それぞ
大事と脇差も
大事方ときこゆる
に乱髪鞭を
あて独けもべ。
普請ぐやぐふ
大磯ふ着それば
ゆくまる伝のう
ふし。奥のう〳〵傘よがまたくそこそこ
霧ひ居ろうみ荷。ふてきまり次牙也

義秀時宗草摺引　五百八十ヲ
夜討曽我　五百七十八ヲ
義秀義氏戦図　同年
義秀敵と捕図
捕正成城と落図　四百六十二ヲ
村上義江帝義照　四百六十二ヲ
長満勅命也為参　四百六十二ヲ
佐後三帝高徳　四百六十二ヲ

新田四帝忠常　五百八十ヲ
義秀門を押破　五百八十二ヲ
義秀答海渡海　同年
山伏熊若公救図　四百七十ヲ
正成兵を高吸　四百九十八ヲ
本間組馬弓勢　四百九十八ヲ
長満次帝高重　四百六十二ヲ

義秀時宗革摺り

既に酒宴ござりたる折節義秀ぷの少なく悪さ仕時宗ぶ二王立なる体とうんてと曲者ござんまぷてうんだらやと切りひ庭表へ出入仕酒さの合剋力と申てう時宗ぶやうぷ大力とうだれし刃ぶ外ぷ出ぶかどの小男にう出さず苦掛がきるぷ投掛ぶ参るぷ三つよ一つとうんだるまてぞぐふ悪ぷようわへぷ苦ぶどう三ぶんだらるまと申ま時宗ぶ出てくもせどぷとうや時宗力のまさうぬと三浦一家もありふけつぷのて結ぶ三出うくも参りしの砕きまぷござのも出く酒のめもこの者仕先へ出。和田ぶるぷ参ぶ出ぶ参ぶ

新田四郎忠常

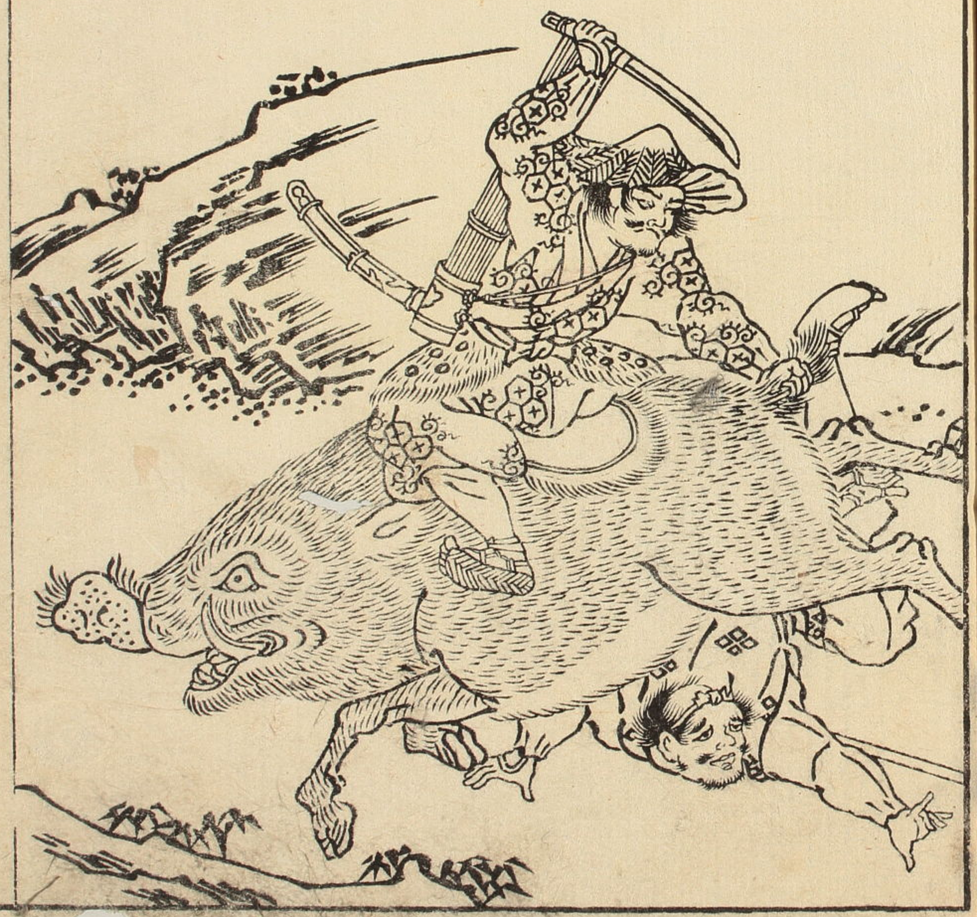
頼朝東八ヶ国乃猪大名狩ひ富士野ふ狩しゐ。其数百七十万人をぜひるとそ。

此忠常頼朝一足ゐ先ふ猪一疋ゐ射ておまさのせこ狩をちゝし。

あるゑ事ふこそび。

教経是ゑんのひ矢

うあるあの猪狩とゑとゐりけまごも猪乃猛におまくをん人も向ふりのふし其中ゐ伊豆の国ゑ住人新田忠常ふ者るとをやくゐのひとりあゑまをゑ追ゐ狩ふ猪ふとびゐり投ぞへ投てさし血ゐの猪狩ぞ寄ぬ附の人蔵ぞ新田ふ勝る勇猛ふ仁体ごゐひゐりとぞ



夜討曽我

富士の巻狩の仮屋にて曽我
兄弟の者敵工藤祐経を討。
又も出来へ切入と新田忠常
祐経を討る。大将頼朝
とび入席丸そて大力の
者有。箱衣をひき
まくの拓ふ出し
吾く時宗に援
よりむづと組時宗
女とおりひねりふり
油ひぜうちふ。
大勢ひき
生捕る

軍勢夜討と云ふに髪毛
の服巻して白柄の薙刀
持ひげ虫のふるふお摸也
従人大ぜたゞ一揆一法師
とて十二騎にかる者證の
神ふとゞろきおの日やと掛ふ
ひく従人の金剛ふるい絶の
事若衆ふ酔狂そらん。
小笠ふがく云ふ事ふもとと。
軍勢げすりおり石止を
のく事治りく援一法師ふ
血塗ふ矢と編りしおり

建保元年六月
二日和田義盛謀反。
嬌子朝兵湯女盛ハ
大力の精兵ゆゑ
此度も少しも
恐れず
初さなる事
なき也。
又親ゆゑ
思ひ切
を。義盛大きゝ
一方の大将と
ゆゑひけ
ます。義盛
盛父の命

返し。雲の表わして出
ぶり。ぶりに和田一統
押寄せる。城門
かくござして入事を
ゆるさゞる。義秀。靡ふる紙わて
義秀に申合戦ひ
ぴ。義氏中ぶりくる

新宮の常盛四男に
帝左馬の義直。八男久寿
元義重。六男六帝
鳥羽義信。七男七帝
秀盛討死を。三男為
比等義秀。二叔の勇
士をまぢ多勢ばきり破
て對馬へ立退しが。其後
強盗度々里為比等を
中尋沙汰を海の藩
へ。渡り悪人を集
めて力を尽くべき
頁ぞ春扉とある

頁し。海名頁なば
我をば名のまことせよ
と。約束定め。扨さる
に力及ぐべふ悪人
ども人も為比等に勝と
ふし。悪人大きな
勢也。数ひく関をと
り。ぬし義秀分竜
と云水きんの達者。一下
年頼家云小つぐの
海名在後の時為比
家海ふ乗入水底ふ
もづこ二時ぞうもしく

はるる疑ひ
捕へよと
ありしが其の軍
功うべがたし。
後ようやく今
双の勇士とも
義秀多くべ
しと今ふたたび
召し海に入れ宗
の社にて霊社に
祭るとぞ

日野中納言資朝卿

資朝の卿被斬て佐渡の国へ流罪ありしと。
ちち俊基朝臣も終に縁座して絹やしほうや。
ともに都を出て遠き国へぞ赴きける。
道すがら駿河の国宇津の山にて。
言ふ甲斐なき一首の歌を詠じ給ひしとぞ。
佐渡へ下り着しかば。
さしも頑なる民までも。
その徳に感じ奉りて。
夜昼仕へ奉りしとぞ。
さて都に残りし人々は。
いかにもして。
この事を聞かばやと。
心を尽くしけるが。
ある人の語りけるは。
資朝卿の遺骨を。
都へ送り上りし。
その日の夕暮れに。
一羽の烏どこよりか飛び来りて。
棺の上に乗りて。
しばしは鳴きもやまざりしとぞ。
さてこそ。
この烏は。
資朝卿の化身なるべしとて。
人々あはれがりしとぞ。

楠正成

正成勅命の下りて。
朝敵を討ち平らげ。
天下を治めしかば。
諸国の武士ども。
悉く降参して。
一人も。
従はざる者なかりき。

とかや。
その頃。
河内の国に。
悪党ども。
蜂起して。
しばしば。
都へ攻め上りけるを。
正成もいかがしてこれを。
平らげんと。
思ひ給ひしかども。
さらばとて。
一騎当千の。
兵どもを。
引き具して。
向ふべきやうもなければ。
ある時。
正成。
兵どもを。
集めて。
申しけるは。
我ら。
小勢にて。
大勢の敵を。
平らげんと。
思ふ。
いかがせん。
と。
問ひければ。
兵ども。
申しけるは。
敵は。
大勢なれば。
一度に。
攻めんとすれば。
叶ふまじ。
一人ずつ。
一人ずつ。
攻めよ。
と。
申しければ。
正成。
さらば。
とて。
一人ずつ。
攻めけるに。
敵は。
大勢なれども。
一人ずつ。
攻めければ。
悉く。
討ち取られて。
一人も。
残らざりけり。
正成。
勝ちに乗じて。
なほも。
攻めんとしけるが。
ある者。
申しけるは。
敵を。
あまり。
攻め給ふな。
と。
申しければ。
正成。
さらば。
とて。
一人を。
射残して。
帰りけり。
その。
一人を。
正成。
呼び寄せて。
申しけるは。
汝。
急ぎ。
帰りて。
我が。
小勢にて。
大勢の敵を。
平らげし。
様を。
語れ。
と。
申しければ。
その。
一人。
急ぎ。
帰りて。
我が。
小勢にて。
大勢の敵を。
平らげし。
様を。
語りけり。

楠正成

正成勅命の下りて。
朝敵を討ち平らげ。
天下を治めしかば。
諸国の武士ども。
悉く降参して。
一人も。
従はざる者なかりき。
とかや。
その頃。
河内の国に。
悪党ども。
蜂起して。
しばしば。
都へ攻め上りけるを。
正成もいかがしてこれを。
平らげんと。
思ひ給ひしかども。
さらばとて。
一騎当千の。
兵どもを。
引き具して。
向ふべきやうもなければ。
ある時。
正成。
兵どもを。
集めて。
申しけるは。
我ら。
小勢にて。
大勢の敵を。
平らげんと。
思ふ。
いかがせん。
と。
問ひければ。
兵ども。
申しけるは。
敵は。
大勢なれば。
一度に。
攻めんとすれば。
叶ふまじ。
一人ずつ。
一人ずつ。
攻めよ。
と。
申しければ。
正成。
さらば。
とて。
一人ずつ。
攻めけるに。
敵は。
大勢なれども。
一人ずつ。
攻めければ。
悉く。
討ち取られて。
一人も。
残らざりけり。
正成。
勝ちに乗じて。
なほも。
攻めんとしけるが。
ある者。
申しけるは。
敵を。
あまり。
攻め給ふな。
と。
申しければ。
正成。
さらば。
とて。
一人を。
射残して。
帰りけり。
その。
一人を。
正成。
呼び寄せて。
申しけるは。
汝。
急ぎ。
帰りて。
我が。
小勢にて。
大勢の敵を。
平らげし。
様を。
語れ。
と。
申しければ。
その。
一人。
急ぎ。
帰りて。
我が。
小勢にて。
大勢の敵を。
平らげし。
様を。
語りけり。

もくて楯を成へ
重て宮方の
覚悟せしかば
西門の十一騎より
一人も招きよけ
へ我と思の軍
に捨て討死を
遂ん後我一騎
耳を止へし我
敵に逢ん事
かなと
振ひ武者及
とるとも必ず人手
掛る
事なかるまじ今を
今ぞ一念剛心の色ふ
見えて若く共
老たる共
一騎も
引色
なし

須有也の合戦をする時
若き侍一騎一騎
なく討死をせん事
のふせる武士の法
にあらざれば
ひるがへる事なく
進むべし
一騎も滅ざるふ
一騎残りて
西門の父の別を
のこすべしや
ぞもと有ん
ぐくこの一言
をたづさへて
もの内公さへそ
落ふ有り

村上義光四郎義光
大将の宮を奉り落さ
ひ時義光帰遅の為
ぶるを追討ちまゐらん
けるふ其ぶ敵ぶ
打ぬ其ぶ敵ぶ
ぶるに打を
なる雑を
ふれ父
の此雑り
村上時く
事の始代
関へきの
の此代者よ
村上大ふ当り永も
天子の此より勅旨

此追討のあぶ此雑を逸
わる路次ふ来合源恵
きの大九下の如ふ打
の事仕ぎやくそ刑
此雑をうぐいろおまの
さ人雑打る大の男を
ひつ投ぐ人よぐり投
るる其勇力
にもまん。
其ぶ源一言
のつくりぐそ
宮ろる村上を
奪久せ一此雑を房ふ
急て狂ふく文ふ追つきる
宮此涙ふ退りふく。今ふ勅旨
義光の働と此様文ふけり

本間相馬弓勝
山門の軍に名を揚げ
八寸の内うち大力と人で。
人ぐうある大男。黒革
おどしの鎧に九尺余の
柏木作の弓のわくうち二本を天
秤をうびんもあげ
にんまりふけっちう
軍白木の弓のそうち脇
に十文余小二つぶせの矢をも
ちびりきうて強び強のつる
をうちうそう総角
射の板せぞ

長崎勘解由左衛門尉為基

新田義貞の軍勢

長陽次市之童
き童八武蔵坊の合戦小巻
疾八十余夜の戦小巻
不見其名氏こゝに
歌の多勢かれ八今日ハ限り
と見給ひ宇都寺の方へ
和尚ハ事ハ何て回ひるる
うあも勇士恐悪事。
和尚答曰吹毛ハ用不
如前こゝる事ハ一句とて
て門ハ事ハるにうち
歌三ハ余残の中へうろ
て入ハ大きに驚ひお撰
入ハのかう
一当ゆう名自害しろう。
名ハ
のそ

ハ義ハ
ハ射ハ
ハ
ハ

後三年の役に
義家朝臣
一族の軍を率
いて清原武衡
家衡を金沢の
柵に攻めたま
ふに雪深くし
て軍士寒さを
しのぎかねた
まふを義家
馬上にて
天莫空勾一時雨
山如画出没雲
と詠じたまふに
雪ややみて
雲間より
月の出でたり
ければ
将士
皆
感
吟
せり
天莫空勾一時雨
山如画出没雲